

シャーロット・スミスの 「フローラ」(1804) 試訳

Translation of Charlotte Smith's "Flora" (1804)

小 柳 康 子

はじめに

イギリス・ロマン主義の分野において、女性詩人や小説家の読み直しはますます盛んになってきており、とりわけ様々な方向から研究されているのが Charlotte Smith (1749~1806) である。スミスは詩や小説だけではなく、晩年には子供向けの本も書いて出版した。これら未成年のための作品には、彼女が問題にした自然と人間というテーマが具体的な形をとって提示されている。1795年の *Rural Walks*、その続編で1796年出版の *Rambles Farther*、1804年の *Conversations Introducing Poetry* は、それぞれ Mrs. Woodfield、Mrs. Talbot という母親と子供たちの会話から成り立ち、植物や動物の詳細な観察を通して、母親が子供たちに人間教育を授けようとする姿が描かれている。これらの作品には、スミスのロマン主義的な自然観が如実に示されているだけでなく、新しい科学になりつつあった植物学の知識をスミスが身につけていたことを認識させるものとしても興味深い。本稿は晩年に出版された2部10巻からなる『会話と詩』の最後に載せられている“Flora”の訳を通して、このようなスミスの特徴を紹介する試みである。

『会話と詩』は、タルボット夫人と George と Emily という子供たちが、自然の中を歩きながら、目にとまった植物、昆虫、鳥などの生態についての会話を交わし、その後これを主題にした詩を読み上げるという構成をとっている。「フローラ」は、花の女神フローラが、春の到来を告げるために地上に降り立ち、大地の生命を蘇らせるさまを、擬人法を用い、ラテン語の学名を駆使して描いた詩で、『会話と詩』の中の多くの詩より難解であるため、死後出版された *Beachy Head: With Other Poems* (1807) にも再録されている。この詩は行数の一定していない16のスタンザで構成されているが、本稿は詩

の分析や考察を目的とするものではないため、原詩の行数にはこだわらず自由に訳した。

1. 苦難から生まれた作品群

シャーロット・スミスは1749年にロンドンで生まれた。⁽¹⁾ 父 Nicholas Turner は、結婚直前に相続した家屋敷を Surrey と Sussex に持つ裕福なカントリー・ジェントルマンだったが、母を3才の時に亡くしたシャーロットは母の妹である叔母に育てられた。派手好きで社交家の父は、妻の死後財産目当ての再婚をしたため、シャーロットは年頃の娘と義母との折り合いを心配した周囲の勧めで、16才の誕生日10週前の1765年に Benjamin Smith と結婚した。これは当時としてもかなりの早婚だとみなされていたようである。

ベンジャミンは西インドに農園を持つ家の跡取り息子だった。スミスは彼との間に12人もの子供を生んだが、夫は頼りない上にひどい浪費家だったため、結婚生活は苦勞の連続であった。とりわけスミスを最も悩ませたのが、義父の遺言状をめぐるごたごたである。義父は浪費家の息子に財産を渡したくないと専門家に相談せず一人で遺言状を書いたが、その内容が理解しがたく、財産をめぐる裁判が続いたからである。ベンジャミンはすんなりと財産を相続できなかつたために借金を重ね、債務者監獄に入れられたこともあった。この当時借金の返済が出来なくなって牢獄に入った人間は家族と住むことができたので、妻であるスミスは夫と一緒に監獄で過ごすという苛酷な体験もしている。その後も借金の取り立てから逃れる夫の後を追って、身重の身で多くの子供を抱えフランスに出かけて一冬を過ごすなど、様々な苦勞を重ねた。そして30代終わりの1787年には、夫と正式に別居し、幼くして亡くなった子供を除いて残された8人の子供たちを自分1人で養育するという、当時の女性としては異例な生活に入ったのである。

子供時代のスミスは、ロンドンのタウンハウスだけではなく、田舎の生活にも親しみ、自然を身近に感じて成長した。従って彼女の詩には様々な形で自然が出てくる。スミスが最初に出版した作品は *Elegiac Sonnets* (1784) というソネット集である。ルネサンス時代にイタリアからもたらされた14行からなる短い詩であるソネットは、伝統的には男性から女性にむけた愛をテーマにするものだったが、スミスのソネット集では、愛ではなく、メランコリックな感情や甘い孤独の喜びなどが多くうたわれている。この詩集は評判

をとり、その後も新しいソネットを追加しながら、何版にもわたって出版が続けられた。このようにスミスは、18世紀には人気がなくなり、書かれたり読まれたりする事のなかったソネットを、新しい内容と共に復活させた詩人として、ロマン主義の研究分野における重要な詩人とみなされるようになったのである。シャーロット・スミスはまた、このソネット集や『ビーチ岬』以外にも、1793年出版の*The Emigrants*という、フランス革命の結果イギリスに亡命を余儀なくされたフランス人を主題にした社会的テーマを扱う詩も残している。

2. 母の教えと植物学

スミスは夫運が悪く、終生借金に苦しむという生活を送った。また最初の子供を早くに亡くしただけでなく、成人後も数人の子供たちに先立たれる悲しみを体験した。しかしこのような苦難が、早くから文筆生活に入り、多くの作品を必死で書き続ける原動力ともなったのである。晩年は病苦に悩まされ続けたが、彼女の心を和ましたのは孫たちの存在であった。幼い孫たちの中でもとりわけスミスの可愛がったのが、息子 Nicholas が愛人との間にもうけた5歳の Luzena である。英語を全く話せなかったルツェナは、父ニコラスの任地インドからスミスのもとへ送られてきた。スミスはこの孫娘のため、金の苦勞が耐えない生活にも関わらず、フランス人のガヴァネスを雇ったほどであった。『会話と詩』の Preface には、この中の詩は5歳の子供が自然の事物を理解できるように書いたもので、もともと出版するつもりはなかったと述べられているが、これは言うまでもなく、「イギリスに着いた時全く英語を話せなかったが、花や昆虫に興味を示していた」⁽²⁾ ルツェナのことを指している。

『会話と詩』の中の詩は、平易な言葉によって自然の事物を観察し、そこから導きだされる教訓を語る。子供たちは、自然の事物についての知識と共に、人間にとって大事な倫理や道徳も教えられるのである。しかし第10巻の最後に置かれている「フローラ」は、ラテン語の学術用語を多用し、倒置、強調、省略なども多く、子供のために書かれたとは言いがたい。前書きとは相容れない詩をこの作品に載せた理由はさておき、スミスが植物学的知見を駆使して書き上げた「フローラ」は、女性詩人の手になる微視的自然描写の見事な例といえるだろう。

「フローラ」は、『会話と詩』の最後の巻である10巻に置かれている。詩についての会話が中心となっているこの巻でタルボット夫人は、詩の擬人化は人形に洋服を着せて遊ぶのと同じだという比喻を用いて、季節や花を擬人化した「フローラ」を何とか娘に読ませようと説得する。⁽³⁾ 夫人は母として、擬人化された植物の愛を描く *The Botanic Garden* を兄ジョージと同じように娘にも読んでほしいと思っているからである。スミスがここで夫人の口を通して、進化論を唱えた Charles Darwin の祖父 Erasmus Darwin の『植物の園』(1791) を褒め称え、それを読むことが若い女性の詩の教育に役立つと考えていることは注目に値する。

ダーウィンは1782年から85年にかけて Carl Linnaeus の *A System of Vegetables* を翻訳し、雄蕊と雌蕊の数を基本にした性体系による植物分類をイギリス人に知らせた人物である。彼はその後1791年に、『植物の性体系』の原理を詩に応用した *The Loves of the Plants* (1789) と *Economy of Vegetation* (1790) を一冊にまとめた『植物の園』を出版し、人々を熱狂させた。⁽⁴⁾ 『植物の園』では、擬人化された植物が大胆に愛を交わす様子が描かれていくが、何より眼を引くのはラテン語の学名をふんだんに用いた詳細な注が付けられていることである。スミスは「フローラ」において、性的描写こそ控えてはいるが、ダーウィンを見習うかのように植物の擬人化を徹底させ、詩本体や注にラテン語の学名を多用して春の喜びをうたいあげた。

「フローラ」の背景には、リンネやダーウィンを通して植物の新しい分類法がもたらされ、植物学が新しい科学として登場してくる時代が透けて見えるということが出来るだろう。またこの詩は、植物についての知識が女性にふさわしいものとされ、初歩的な植物学が女性に奨励されていく状況をも明らかにしてくれる。母と子供たちの会話から成り立つ作品の中に置かれた「フローラ」は、植物学が女子教育に役立つものとして奨励されてゆく時代のありようだけではなく、教育者としての母親の役割の意味を考えさせる詩として読むことも可能だということである。これは、18世紀半ば以降、女性によって初歩的な植物学的著作が書かれていく状況とも関わっていると思われるが、これについての考察はまたの機会にゆずりたい。⁽⁵⁾

3. 「フローラ」

疲れ果てた心が、人間の犯罪と愚行、

敵意に満ちた脅しと不快な自慢話からしり込みする世界、
 平和のもたらす楽しみのない世界から離れて、
 空想の支配する王国へと向かい、
 嘆くしかない苦しみを甘い忘却の中にしばし忘れることを
 喜ばない人はいないだろう。
 それだから空想よ、やってきてください。
 理想の喜びの女王である空想よ、私にもう一度
 あなたの魔法の絵筆を貸してくださるために。
 今より幸福だった幼い頃の春に、
 故郷の緑なす道野辺でよく遊び戯れるのをみた
 あのものたちの姿を私が再びもたらすことができるように。
 あなたの絵筆で魅惑的な花の女神を描くことを教えてくださるために。
 花の女神の大権は憂いを帯びた美の顔にたれこめる雲を追い払うこと。
 日毎強くなる陽光と生暖かい驟雨が、
 笑いさざめく春の陽気な時を導き入れるとき、
 青白い顔をした女性に健やかな顔色を取り戻させ、
 新たな恵みで苦しみを忘れさせ、新鮮な輝きで顔を染めさせること。

ヴイジョンが来る！ うろつく夜の闇が
 東の空の光を受けてゆっくりと溶けてゆく時に。
 濡れた明けの明星はまだ消えてはいないのだが。
 美しい空想がフローラを連れてくる。葉の茂った車に乗り
 フローラが空から降りてくる。待ちうける大地に衣装を着せ、
 種を目覚めさせ、幼芽に現われ出よと呼びかけるために。
 そしてひとつひとつの冬芽に、小さな花粉室を広げて、
 絹のように柔らかい葉と金色の目を開けるように命じる。

フローラの車は魔法の技で組み立てられ、
 茂った森の一番堅い木で作られていた。
 つる植物のからみつかないオークとセイヨウカエデ、
 うつろな幹一面に緑が覆うブナノキとトネリコで。
 座席は白い花を浮き彫りにするユキノシタ、
 壁面を這うコケからビロードの足載せ台が生えだし、

アツモリソウをはいたフローラの細い足がその上に載っていた。
絹のように柔らかな王冠は房になったワタスゲで、
ごく薄いローブの生地は、やさしい虹色に染められた漂うアザミの冠毛。
まだ蕾も不完全な野生のセイヨウヒルガオのつるが女神の簡素なベルト。
輝く巻き毛は少しの後れ毛となり、
魅惑された大気の上に漂っていた。
残りの髪はナガミノセリモドキの櫛の葉先でまとめられ、
輝く束髪となって後髪に光彩を添えていた。
そして至高の統率権の王しゃくとして
女神は手に持つハルガヤをうち振るった。

女神の周りには、西陽の中で遊び戯れる無数のハエのように、
数え切れないシルフたちが集まり、
魔法の力で柔らかな蕾を守り、生まれたばかりの花を養う。
花を支える茎の周りにか細い巻きひげを巻きつけて、
風が花粉を撒き散らさないように注意し、
日陰を与えて、はかない命の花の色を強すぎる陽光から守り、
香り高いカップに透明な露を受けとる。
他のシルフたちの手荒な仕事は、
昆虫を追い払って植物の命を守り、
蜘蛛が織る糸の汚染をやさしい息で吹き払い、
開きゆく葉からアブラムシを払いのけること。

征服のための武具をつけた小さな戦士は、
とげのある槍をふるい、
こけでできたくぼんだ頑丈な盾を広げ、輝く銀でできた
堅くて軽い真珠のようなルナリアの小さな輪を持つ。
かぶとを載せた頭に輝くのは真紅のフォックスグローブか、
また武人の前額を保護するのはタツナミソウか。
一方、セイヨウタンポポは冠毛をそびえさせ、
カブトの上に優美に揺れながら現われ出る。
厳しい目つきの勇ましい指揮官は、
血の滴るアラムの葉の長い棍棒をつかむ。

こちらの勇士はオナモミのトゲで敵を苦しめ、
 あちらの戦士はバラから借りた紫のトゲを持つ。
 また別の戦士たちは甘い蜜腺の中に身を横たえて、
 餌食をねらう角持つ陰険なハサミムシを追い払い、
 鱗片に覆われたとんぼを恐れもみせず
 に攻撃する。
 また鋭い槍を近づくカタツムリに投げつけ、
 羽持つ蟻を軽い翼の上に捕らえ、
 飛行中の甲虫を真逆さまに打ち落とす。
 美しい女王の周りには戦士に劣らず熱心に仕える
 軽やかな女性の妖精たちが見える。
 フロスチェラの身に着ける紫の豪華なベストは、
 ムラサキツユクサがまとう房で織られたもの。
 その頭の両側を美しく飾るのは微小なゴジアオイの花。
 細い腰の周りに巻かれているのはイトランの糸。

驚異的な労働によってバラの香り高い葉を織り、
 巣を作る野生の蜂から
 美しいペタラの輝く集散花は借りたもの。
 星のようにきらめく小さなオトギリソウは、
 ペタラの美しい巻き毛の上に小さな花輪を巻きつけていた。
 そして、官能的な香りの息吹を発散しながら、
 ネクトリニアがやってきた。
 絵の中の天使の周りにゆらめく光の矢の輝きのように
 トケイソウの射出花は投げかけた、
 若いシルフの頭上に空色の栄光を。
 彼女の体の周りにはしなやかな巻きヒゲが絡みつき、
 風になびくスカーフを締め付けていた。

準ニンフであるカリクサの装いはこれより地味で、
 ベストは茶色の透明な仏炎苞で作られていた。
 漆黒の髪に巻きつく銀色の総苞は、
 キセランテマムの色あせないガクで、
 ラセンランの軽い飾り帯は、

カリクサの華奢な胸の上で薄い上着を押さえつけていた。

だが面影と言葉はどこに見出すことができるだろう、
あの大空の美しい姿を描くための、
花の女王の周りに付き従っていたあの者たちの？ 彼女たちは付き従う
フローラの眼差しに包まれ、
その微笑の中で戯れ遊んでいたのだが。

いま陽気な行列は大地に向かう、
ほら、軽やかな大気から車が降りてくる。
これから始まる変化に富んだ年の前触れをなす、
月々に色とりどりに咲く花々が現われ、
膨らんだ球根から地上に花が開く。
ここには比類なく美しい色のヒヤシンスが咲き、
天の息吹を伝えてくれる。向こうには気高い額を
真珠で飾ったヨウラクユリが姿をみせる。
青いリンドウが柔らかな大地からそっと姿を現し、
キズイセンとスマレが芳香をまき散らす。
スイカズラは貝の形をした角を高く上げ、
雪のような花がイバラの上を白くする。
ここでは、パリに与えられた宿命的なあの果実のように、
黄色のバラが黄金の丸い花を誇示する、
この果実は天上の国で女神たちの間に激しい諍いをひろげたもの。
あちらでは、トゲのある小枝の間にそれよりも美しく、
黄バラのライバルの赤バラがさらに美しく輝く、
夏の太陽が西の空を染める色よりも明るい色で。
ほとんど色のない蒼白なバラは広げる、
ため息をつく風にその控えめな美を。

未開の深い森の至るところに、
花の女神の力が穏やかに広がる。
セイヨウトチノキは美しくピラミッド型に聳え立ち、
カラマツの上には真紅の飾り房が現れる。

北方生まれの陰鬱なモミノキは
 自分の権威を柔らかに振るう。
 でこぼこしたオークの上に小さな芽がゆっくりと現われ出る。
 このオークから作られる巨大な軍艦が世界に命令を発しますように！
 森の茂みはみな香り高い大気を感じる。
 日陰を好む植物はあちらに花をつけ、
 むき出しの岩はフィリケスとハリガネゴケとともに微笑み、
 荒れ野はタイムとカモミールで華やぐ。

さあ！ もう少し甘美な夢を長引かせて、
 山間の流れにその夢の力をたどってみるがいい。
 ほら、ミヤミメシダと艶やかなハナヤスリの垂れ下がる荒々しい岩から、
 川の源が清らかで透明な滴りとなって湧き出てきて、
 上流の低林を抜け、はじめは密かに、
 次にはつぶやき声をたてながら、
 くねくねとうねる岸に沿って流れてゆく。
 そこではヨシキリがささやき、カワセミが身を隠す。
 サルヤナギとカンバの木陰に囲まれた流れに、
 花の女王の船出する姿が空想の目には見える。

ガマで織られたフローラの軽い舟の上に、
 睡蓮が素晴らしい日陰を与える。
 向こうの銀白色のヤエムグラと
 岸に生えているヤナギランが
 女王の柔らかな長いす。そしてシルフたちが、
 広がってゆく川の水をしなやかな腕で分けるとき、
 多くの葉が流れに沿って左右に開く。
 揺れ動く刀の間に、金色に輝く色の
 アイリスが頭をもたげる。こちらではオモダカと
 ウマノアシガタが、おびただしい数の花を広げ、
 静かな流れを輝かす。あちらの高い場所では、
 自らの素晴らしい美を誇るハナイが
 ばら色の散形花を持ち上げる。

そのとき川はハナイの魅力を映して赤く染まる。

水の精ナイアスは美しい女神を導く、
 花々が咲き乱れる牧草地と平らな草原を越えて、
 海へと。そこでは塩味のする砂でさえも、
 海の植物をフローラの輝く手に差し出す。
 砂浜には海の露と大気に育てられた
 ツノゲシの花が咲き、緑灰色をした
 ハマアザミを退く潮が洗うのだから。
 波に染められたかのようにハマアザミの葉の色は淡い。
 休みなく寄せては返す大波の上に突き出たがけの中ほどに、
 明るいギョリュウが起きあがる。むき出しのがけの頂きには、
 ハマカンザシが群がり生えている。そこには立ちあがって
 遠くのシグナルや近づく船を見つめる漁師に踏みつけられた
 オカヒジキの星のような茎が一面に撒き散らされている、
 まるで気にもとめられず知られもしないつまらない宝でもあるように。

透明な洞窟からサンゴが生え出て、
 渦巻く波を真紅の枝で砕き、
 潮の変化につれて藻類が流れ、
 花でもあり魚でもあるイソギンチャクが身を隠し、
 ツルモの長い固着するヒモが
 サンゴ藻で光るシダ形の葉にからみつく深みから、
 魅惑的な空想が海の乙女達に呼びかける。
 薄暗い洞穴や貝の敷き詰められた大広間から
 その声に魅せられて、輝く海の乙女たちが現われ出て、
 丸く渦巻く波の上を軽やかに漂う。
 海の微風の中で揺れる緑の細い藻糸が、
 乙女たちの薄い上着と透明なヴェール。
 貝のパニエをつけ、絹のようなピンナでできた銀色のヒモで
 結ばれた乙女たちはみな、植物のトロフィーを持ってくる、
 海の中の岩や洞穴から、
 革のように堅く茶色い枝の間に膨れた芽をつけた植物のトロフィーを。

そこでは、しわになったアマノリが黒いひだを広げる、
濃く薄く色づいた赤い小さな木であるアマノリが。
遠くでは旗の形をしたオリーブ色の海藻が垂れ下がり、
輝く小石から妖精の扇が現われる。
そして水の精ネイレイドたちはフローラの陸の精たちに出会い、
女神の足元に塩の匂いのする海の獲物を捧げる。

ああ、奔放な空想の衣を着て、詩人の夢の中を流れ行く
神々の中でも最も美しい女神よ、
あなたの葉や花からなる持ち物、
すなわち、色彩豊かな庭園、灌木が木陰を作るあずまや、
黄色い草原が、いつまでも春の最初の輝く栄光と共に、
子供の楽しい心とはずむ足を招き寄せますように。
いまだ悩みとは無縁の散歩者が、
鬱蒼とした森や岩だらけの岸を探索し、
緑の草原に登り、エニシダの生い茂る荒地を歩き回るとき、
彼の未来の嗜好が、「真実」と「自然」によって作り上げられますように。
女神よ！ 若者の祝福された時の上にあなたの恵みを与えてください。
美の処女の額に美しい花輪を載せてください。
また空想の比類なき花輪が、いつまでも変ることなく編まれますように、
結婚愛の金色の鎖の周りに。
だがなにより、悲しみの手に打ちひしがれている者のためにこそ、
あなたの花壇に花が咲き、荒れ果てた土地が彩られんことを。
また、運命の女神にも世間からも忘れられて、
悲嘆にくれる者が戻ることのない打ち砕かれた幸福を思い、
頭を垂れる孤独な場所、
（「悲しみをしみじみ味わう贅沢は粗野な者には無縁だ」）、
そのような者はいとしい姿を忘れやらず、
悲しみを求め、心に後悔を抱きしめて、
消えやらない愚かな悲しみと共に、
戻らない喜びと希望を嘆くことを愛するのだが、
なんじ幻の力よ、このような場所で嘆く者に命じられんことを、
前と変わらぬ美しい姿を見るように—その姿もまたすぐ消え去るが、

疲れきった巡礼者の目を慰める間だけは、
来るべき楽園の姿を見せてくれるのだから。

本稿は2005年5月28日(土)に早稲田大学で行われた「第24回イギリス・ロマン派講座—名詩の解釈と鑑賞」において、「Charlotte Smith, “Flora” — 女性詩人の植物への愛」というタイトルのもとで行った詩の講義に基づいたものである。スミスの生涯と詩の訳は当日の発表原稿を使用した。 「母の教えと植物学」は新たに書き加えた。

注

- (1) スミスの生涯をまとめるに際しては、次の2冊を参考にした。Loraine Fletcher, *Charlotte Smith: A Critical Biography* (London: Macmillan Press, 1998); Carrol L. Fry, *Charlotte Smith* (New York: Twayne Publishers, 1996).
- (2) Charlotte Smith, *What Is She?; The Conversations Introducing Poetry: Chiefly on Subjects of Natural History. For the Use of Children and Young Persons*, ed. Judith Pascoe, 14 vols. (London: Pickering & Chatto, 2007) 13:61. 以下 *Conversations* と略す。
- (3) *Conversations*, 225-6.
- (4) デズモンド・キング=ヘレ『エラズマス・ダーウィン: 生命の幸福を求めた科学者の生涯』和田芳久訳(東京、工作社、1993) 296-362。
- (5) 女性と庭、植物(学)、博物学(natural history)に関しては、Londa Schiebingerなどの、近代科学がいかに女性を排除してきたかの先鋭的研究によっても明らかにされてきているが、今後は、Ann B. Shteirが行っているような、女性たちの書いた一次資料を読み、女性たちが時代の中でどのように生きたのかをも明らかにしていく作業が求められるだろう。これは人間と自然という古くて新しいテーマを女性のテキストを中心に再考察し、「庭園史」や「科学史」を書き直すことであり、「教育者としての母が教える植物学」という女子教育の新たな視点もここから生まれてくることになると思われる。

参考文献

Primary Sources:

- Smith, Charlotte. *The Poems of Charlotte Smith*. Ed. Stuart Curran. Oxford: Oxford University Press, 2003.
- _____. *What Is She?; The Conversations Introducing Poetry: Chiefly on Subjects of Natural History. For the Use of Children and Young Persons*. Ed. Judith Pascoe. vol. 13 of *The Works of Charlotte Smith*. 14 vols. 2005-2007. London: Pickering & Chatto, 2007.

- Darwin, Erasmus. *The Botanic Garden*. vols. 1 and 2 of *The Poetical Works of Erasmus Darwin*. 3 vols. London: J. Johnson, 1806. Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997.
- Grant, Charlotte, ed. *Literature and Science, 1660-1834*. vol. 4. *Flora*. London: Pickering & Chatto, 2003.
- Thomson, James. *Poetical Works*. Ed. J. Logie Robertson. Oxford and New York: Oxford U. P., 1971.
- ジェームズ・トムソン『ジェームズ・トムソン詩集』林瑛二訳、東京、慶應義塾大学出版会、2002。

Secondary Sources:

- Benjamin, Marina, ed. *Science and Sensibility: Gender and Scientific Enquiry 1780-1945*. Oxford: Basil Blackwell, 1991.
- Bennett, Sue. *Five Centuries of Women and Gardens*. London: National Portrait Gallery Publications, 2000.
- Conan, Michel, ed. *Bourgeois and Aristocratic Cultural Encounters in Garden Art, 1550-1850*. Washington. D. C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection, 2002.
- Cuthbertson, Yvonne. *Women Gardeners: A History*. Denver: Arden Press Inc., 1998.
- Fletcher, Loraine. *Charlotte Smith: A Critical Biography*. London: Palgrave. 1998.
- Fry, Carrol L. *Charlotte Smith*. New York: Twayne Publishers, 1996.
- Hunter, Lynette and Sarah Hutton, eds. *Women, Science and Medicine 1500-1700*. Phoenix Mill: Sutton Publishing Limited, 1997.
- King-Hele, Desmond. *Erasmus Darwin: A Life of Unequalled Achievement*. London: Gilesde la Mare Publishers Limited, 1999.
- Koerner, Lisbet. *Linnaeus: Nature and Nation*. Cambridge: Harvard U. P., 1999.
- Neal, Bill. *Gardener's Latin*. Chapel Hill: Algonquin Books, 1992.
- Pascoe, Judith. "Female Botanists and the Poetry of Charlotte Smith." In *Re-Visioning Romanticism: British Women Writers, 1776-1837*. Eds. Carol Shiner Wilson and Joel Haefner. Philadelphia: Pennsylvania U. P. , 1994.
- Patricia, Phillips. *The Scientific Lady: A Social History of Woman's Scientific Interests 1520-1918*. New York: St. Martin's Press, 1990.
- Pavord, Anna. *The Naming of Names: The Search for Order in the World of Plants*. New York: Bloomsbury Publishing, 2005.
- Schiebinger, Londa. "The Private Life of Plants: Sexual Politics in Carl Linnaeus and Erasmus Darwin." Ed. Marina Benjamin. *Science and Sensibility: Gender and Scientific Enquiry 1780-1945*. Oxford: Basil Blackwell, 1991.
- Shteir, Ann B. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760 to 1860*. Baltimore and London: The Johns Hopkins U.P., 1996.
- _____, and Bernard Lightman, eds. *Figuring It Out: Science, Gender, and Visual*

- Culture*. Hanover: Dartmouth College Press, 2006.
- Smith, A. W. *A Gardener's Handbook of Plant Names: Their Meanings and Origins*. New York: Dover Publications, 1997.
- Stearn, William T. *Botanical Latin: History, Grammar, Syntax, Terminology and Vocabulary*. Portland: Timber Press, 2000.
- Way, Twigs. *Virgins, Weeders and Queens: A History of Women in the Garden*. Phoenix Mill: Sutton Publishing Limited, 2006.
- アグネス・アーバー『近代植物学の起源』月川和雄訳、東京、八坂書房、1990。
- C. M. スキナー『花の神話と伝説』垂水雄二・福屋正修訳、東京、八坂書房、1999。
- 英国王立園芸協会監修『A-Z 園芸植物百科事典』、東京、誠文堂新光社、1996。
- 清水建美『図説 植物用語事典』、東京、八坂書房、2001。
- 塚本洋太郎総監修『園芸植物大事典』、東京、小学館、1994。
- デズモンド・キング＝ヘレ『エラズマス・ダーウィン：生命の幸福を求めた科学者の生涯』和田芳久訳、東京、工作社、1993。
- 西村三郎『リンネとその使徒たち 探検博物学の夜明け』、京都、人文書院、1989。
- _____『文明の中の博物学 西欧と日本 上・下』、東京、紀伊國屋書店、1999。
- マイケル・グラント / ジョン・ハイゼル『ギリシア・ローマ神話事典』入江和生ほか訳、東京、大修館書店、1988。
- マーガレット・アーリク『男装の科学者たち ヒュパティアからマリー・キュリーへ』上平初穂ほか訳、札幌、北海道大学図書刊行会、1999。
- 水之江有一編著『絵でみるシンボル辞典』、東京、研究社出版、1986。
- ロンダ・シービンガー『科学史から消された女性たち』小川眞理子ほか訳、東京、工作社、1992。
- _____『女性を弄ぶ博物学 リンネはなぜ乳房にこだわったのか?』小川眞理子・財部香枝訳、東京、工作社、1996。
- _____『植物と帝国 抹殺された中絶薬とジェンダー』小川眞理子・弓削尚子訳、東京、工作社、2007。